龍門石窟擂鼓台南洞、中洞試論

久　野　美　樹

はじめに

龍門石窟東山にある擂鼓台南洞、中洞の造形については、これまで西山の各石窟に比べあまり注目されることがなかった。しかしそのような中でも、擂鼓台南洞中尊像の尊名については時折議論がなされ、降魔触地印釈迦如来説、大日如来説等諸説あり特定されていなかった[1)]。筆者は擂鼓台南、中洞両窟を『華厳経』『梵網経』を中心にした華厳系の受戒の世界の産物ととらえ、華厳系信仰にとり重要な石窟として考察を試みる。

一章　擂鼓台南洞の造形と制作年代

【一】 造形のありよう

擂鼓台南洞は間口7.88メートル、奥行7.9メートルの正方形の平面に、高さ６メートルの四壁がほぼ垂直に立ち、四壁全てに千仏坐像が高浮き彫りされ、天井は中央に大蓮華を配しゆるやかなカーブを描いている。現在窟床面中央には、幅3.3メートル、奥行2.3メートル高さ１メートルの長方形基壇が設けられ、さらにその上に台座があり中尊像が安置されている。

a. 中尊像（図１、５、７）

基壇上の宣字形台座は幅1.68メートル、奥行1.2メートル、高さ86センチで下縁に覆弁反花蓮華をめぐらす。台座上には、偏袒右肩に大衣をまとい、

右手で触地印を結び左手を腹前におさめる像高2.15メートルの如来像が結跏趺坐する。如来像は円筒形宝冠をかぶり、胸には中央下部に突起のある幅広の飾りをつけ、右腕には二段重ねの宝珠形をあしらった豪華な臂釧をはめている。切れ長の目はつり上がるのが特徴的で、豊満でやや面長顔、顎は引かれ、横から見ると背筋が大変伸びている。肩幅は広く、両肩の線は水平に近く張りつめ、胸も隆起してボリュームがあり、腰が絞られ、組んだ脚の量感も著しい。

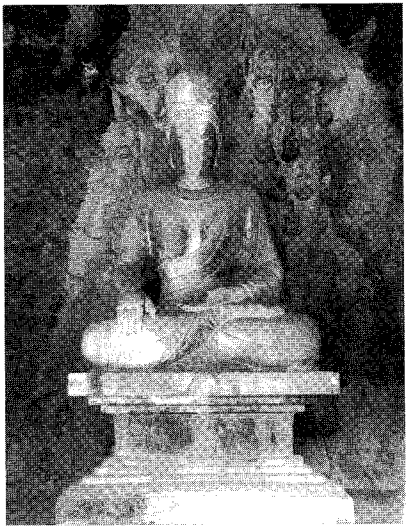
b. 周壁の千仏像（図2、3、4、6、18）

擂鼓台南洞の四壁には高さ34—36センチの千仏坐像が高浮き彫りされ、765体が現存している。坐像群は宝冠を着けているので従来これらを菩薩とする見方もあったが、螺髪を確認できる（図2）上、龍門石窟研究所も現在は千仏と認めている。

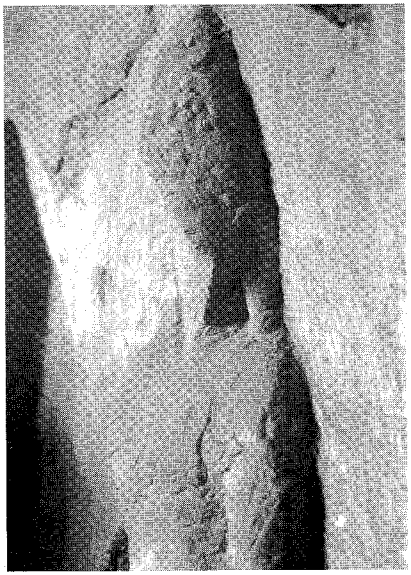
千仏はどれもたっぷりとふくらんだ半球状仰蓮の蓮華座上に結跏趺坐する。蓮華座は全て独立し、蓮茎によるつながりはない。千仏像の彫刻はいずれも極めて精緻で、本窟の造営主がかなりの経済力と指導力を持ち合わせていたと考えられる。

千仏像には大きく分けて二つのタイプがある。まず一つは、中尊像と同じように偏袒右肩に大衣をまとい、幅広の胸飾と宝珠をあしらった臂釧、耳璫を着けるタイプである。このタイプではほとんどが右手で触地印をとり左手を腹前におさめるが（図3）、ごくわずかに禅定印像もある。

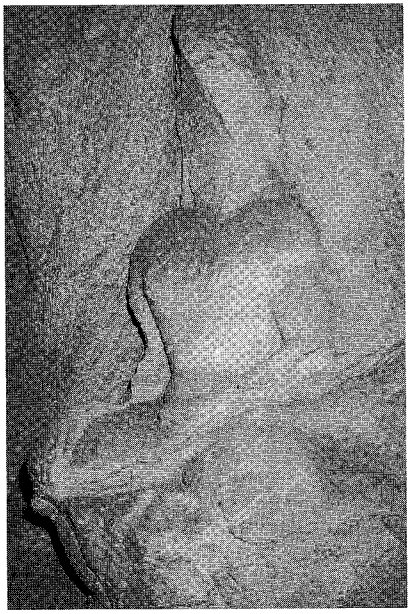
今一つは、そのほとんどが大衣を通肩に着て、その上に珠飾りの縁取りのある三叉状の肩掛けをつけるタイプである（図4）。肩掛けの縁取り装飾以外にも首、腹、像によっては下半身にまで豪華に瓔珞を飾り、耳璫をはめている。同様の形式の像はアフガニスタン、パキスタン、カシュミール地方、ホータン付近にも見られ、いわゆる「飾られた仏陀」と称される像の部類に入る[2)]。擂鼓台南洞周壁におけるこのタイプの像は、多くが施無畏印、禅定印をとるが、転法輪印像も少しある。



1　擂鼓台南洞中尊像

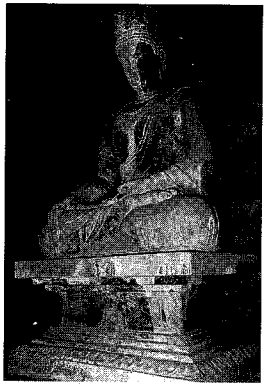


2　擂鼓台南洞東壁触地印坐像

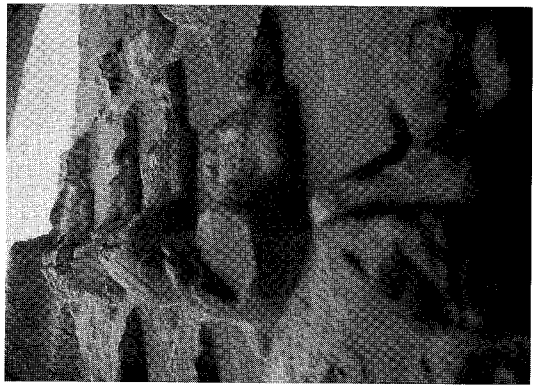


3　擂鼓台南洞周壁触地印坐像

4　擂鼓台南洞周壁「飾られた仏陀」坐像



5　擂鼓台南洞中尊像



6　擂鼓台南洞西壁千仏像群

c. 中尊像後代持ち込み説について

龍門石窟研究所によると、本窟中尊像は清朝末あるいは民国時代に付近の寺院から本洞へ持ち込まれたとされている。しかし、中尊像は制作当初本窟にあり、一度窟外の寺院へ運ばれ、20世紀に入り再び擂鼓台南洞に戻されたと推測する。

周壁千仏像を中尊像と比較した場合、まず千仏像の約半数が中尊像と同じく偏袒右肩に大衣をまとい触地印をとる形式である。特に触地印をとる千仏像は中尊像同様肩幅が広く、両肩の線が水平に張りつめ胸が隆起し腰が絞られている上、その他の千仏像も含め側面観では中尊像と近いボリュームをもつ（図5、6）。千仏像の脚部のボリュームは中尊像ほどではないにしても、両者は胸飾上部に連珠で縁取りをする点も共通しており、中尊像は元来本窟に安置されていたと考えて差し支えないと思われる。

【二】 擂鼓台南洞の制作年代

擂鼓台南洞の制作年代を考える際引き合いに出される資料は、擂鼓台南洞から北へ30メートルほど離れた所に鑿たれた、いわゆる劉天洞像である[3)]。劉天洞（第2093号）は、奥壁に宝冠のない触地印坐像、左右壁に擂鼓台南洞周壁像と全く同じ様式、形式を備えた坐仏像を計20体（現存12体）配した間

口1.5メートル奥行2メートル弱、高さ1.1メートルほどの小龕である。これを劉天洞と称するのは、その真上に掘られた小龕第2094号の前方北壁に、天授3年（692）阿弥陀像を造ったという劉天という人物の造像記が刻まれている事に由来する。従来、この上下窟は一組と考えられ、692年以前に上下窟とも開かれたとされてきた。しかしまず第一に、現在上の龕に残る弟子、菩薩、天王、力士各像と下の龕の造像は様式が異なり、この上下龕を一組とは考えられない[4]。上龕が造られなければ劉天の造像銘は刻まれないので、確かに上龕は692年以前に掘られたと考えられる。下龕は、これを造るために上龕の底部を破壊しており、その制作年代は692年を上限とするのが妥当であろう。従って、下龕像と同様の擂鼓台南洞像の制作年代の上限は692年としたい。

擂鼓台南洞像の制作年の下限は、同じ東山にある高平郡王洞の造像との比較に求めたい。本窟は、間口が10メートル近くある大窟だが一部未完成に終わっている。本窟の名称は、武周期の高平郡王が本窟を造ったとする造像記が以前本窟から発見された事に由来する。武則天の甥、武重規が高平郡王の任にあったのは、天授元年（690）から神龍元年（705）なので、本窟造営年代の上限はこのあたりに求められる。

高平郡王洞制作年の下限は、則天文字が記され造営年代が武周期（690―705）と知られる擂鼓台中洞像と本窟との比較で考えたい。高平郡王洞奥壁の転法輪印をとる如来坐像や脇侍菩薩立像を擂鼓台中洞の如来倚像や脇侍菩薩立像と比べてみた場合、両者はあまり隔たらない様式により造られているが、高平郡王洞像の方がやや硬直化している。よって、高平郡王洞像制作年の下限は武周期を若干下るといったところではないだろうか。

その高平郡王洞には、通高110センチの多くの如来像が蓮華座上に坐し高浮き彫りされているが、その中にも偏袒右肩に大衣をまとう完成された触地印坐像がある。本像が右腕につけている臂釧には何も文様がなく、単に円を彫り出すのみで、触地印像表現に形式化の跡がうかがえる。よって高平郡王洞像の制作年は擂鼓台南洞像のそれよりやや下るとみられ、結局擂鼓台南洞像の制作年代は擂鼓台中洞像と同様、武周期といったところが適当であろう。

この事は、次章【二】b.で後述する則天期造営の龍華寺洞正壁中尊像[15]と、

擂鼓台南洞中尊像を比較した場合、両者脚部のボリュームと衣文線の表現がほぼ一致する点からもうなずける。

二章　擂鼓台南洞像の主題

【一】『華厳経』、『梵網経』の世界

『八十華厳』は、695年から699年にかけて龍門石窟のある洛陽で漢訳されている。筆者は、擂鼓台南洞がこの『華厳経』と、『華厳経』の説相に通じるといわれる『梵網経』に基づき造られていると考えるので、その理由を以下に示す。

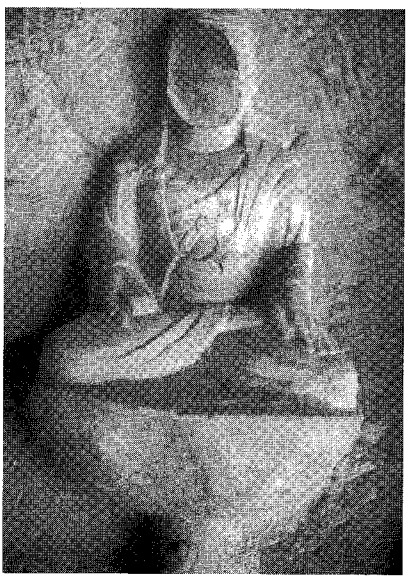
a. 中尊像

まず第一に『華厳経』は、釈迦がマガダ国のボード・ガヤーで成道してから初転法輪までの二週の間に、悟りの内容を釈迦の法身である毘盧舎那仏が表明したとされるものである。この際釈迦は菩提樹下に坐したまま悟りの場を離れず、沈黙したまま天上の諸世界に移動し、再び地上へ戻るという構想になっている[5)]。この状況の造形化を考えるならば、釈迦が成道した姿、すなわち降魔触地印をとる本像を盧舎那仏と解釈する事は可能である。

『華厳経』の教主盧舎那仏の造形は、675年に完成した龍門石窟奉先寺洞像、752年に開眼供養を行った奈良東大寺の大仏像が有名である。いずれも右手施無畏印をとっていたと思われるので、降魔触地印像を盧舎那仏とするのには違和感を覚えるかもしれない。しかし奉先寺洞像、東大寺像は国家仏教の中心的存在として造られているので、一般貴族等の観者に説法する形、観者に対してアピールする形となる施無畏印がふさわしいであろう。それに対して、擂鼓台南洞は本稿三章で後述するように、僧の修行場の性格が強いと考えられるので、『華厳経』本来の盧舎那仏についての解釈が用いられたと推測される。

また『梵網経』二巻は正式名を『梵網経盧舎那仏説菩薩心地戒品』と称し、

7　擂鼓台南洞中尊像頭部



8　老龍洞第204号龕盧舎那仏銘像

『華厳経』と思想的基盤を同じくして五世紀の劉宋時代に中国で成立したとされ、中国、日本の大乗仏教では今日まで重要な戒律本である。この『梵網経』下巻では、盧舎那仏が釈迦の身を現じて戒本を誦するというかたちで、順次戒律が説かれていく[6]。すなわち、盧舎那仏は釈迦と一体という切っても切り離せない存在に語られている。

擂鼓台南洞中尊像の宝冠正面には、連珠に囲まれた大きな宝珠と多くの宝雲が刻まれているが（図7）、『八十華厳』には「毘盧舎那の妙宝珠の如意摩尼は光耀を発す」とある。摩尼は『八十華厳』に初めから極めて多く出てくるが、「如来十身相海品」には毘盧舎那如来が備えている九十七の大人相が挙げられており、摩尼と共にさまざまな雲が表現されている[7]。

『梵網経』では、盧舎那仏は百万蓮花赫赫光明座上に坐していることになっているが、擂鼓台南洞中尊像は大きな蓮華座に坐ってはいない。しかし、宣字形台座は方形をしており成道を果たした金剛座に置き換えて考えることができ[8]、宣字形台座の周囲には立派な蓮弁がめぐらされているので、これを盧舎那仏像の台座に当てることはそう無理なことではない。

b. 千仏像

盧舎那仏像の周囲に化身の小釈迦像を配する造形というと、東大寺大仏像蓮弁の線刻や奉先寺洞中尊像の蓮弁にわずかに残る浮彫を思い出すが、ここではそのイメージを一度忘れていただきたい。

『梵網経』には、「等正覚を成じ、号して盧舎那と為す、蓮花台蔵世界海に住す。其の台の周辺に千葉あり、一葉一世界にして千世界と為す。我れ為めに千釈迦を化して千世界に拠らしむ……千花上の仏は是れ吾が化身、千百億の釈迦はこれ千の釈迦の化身なり。吾れ已に本原たり、名けて盧舎那と為す」、あるいは「我今盧舎那まさに蓮華座に坐す、周匝せる（まわりをめぐりまわる）千葉の上にまた千の釈迦を現ず、一華に百億の国あり、一国に一釈迦まします」[9]とあり、盧舎那仏と千釈迦の関係は、東大寺像等のように盧舎那仏像蓮弁に彫られても良いかもしれないが、千釈迦が蓮華座に乗り盧舎那仏の周囲の虚空に浮いているというイメージから、周壁に浮き彫りされても違和感はないと思われる。ことに、周壁千仏像の約半数を占める触地印仏は容易に化身の小釈迦と解することができよう。以上、擂鼓台南洞では明らかに千の小仏像が彫刻されていたと思われ、『梵網経』の説く光景と一致する。

千仏像が坐る蓮華座はどれも全く蓮茎によりつながれていない。蓮茎で結ばれていない蓮華の表現は、宮治昭氏が指摘するように、『如来蔵経』や『大智度論』等の大乗経典がよく説く、光が化して蓮華となる表現と思われる。その造形は例えばモハマッド・ナリーのいわゆる「大乗仏教の説相」にみられ、ガンダーラから中央アジアにかけての表現方法といえる[10]。『大智度論』では「一一の光が化して千葉金色の宝華と成り、この諸々の華の上に皆化仏有りて結跏趺坐し、六波羅蜜を説く」という[10]。

華厳信仰関係の霊験譚を集めた『華厳経伝記』には、咸亨4年（673）の事として「家内塔中で華厳経を転読しているとたちまち奇光が射し込んで、壁上に華さき久しく方（あたり）にとどまり、第二の遍光は仏堂のあまねく四壁を照らし、是により遠近を同じく観じた」という[11]。

擂鼓台南洞は、まさに『如来蔵経』や『大智度論』等の流れをくみ、盧舎

那仏の発した光が周壁に華さき蓮華となり、その上に化身の千仏、小釈迦像が配されていると考える。

【二】 類似の造形との比較

a. 龍門石窟の盧舎那仏像

唐時代龍門石窟には、675年完成の奉先寺洞盧舎那仏像を含め計4体の盧舎那仏銘像がある[12)]。しかしその図像は一定していない。

このうち最も注目に値するのは、武周期の天授2年（691）の年号をもち、擂鼓台南洞と制作年の近い老龍洞（第669号）中の第204号龕像である（図8）。本像は、双領下垂式に大衣をまとい半球状仰蓮の蓮華座上に結跏趺坐し、右掌は膝上に仰向けられ第一、二指を伸ばし他の指は屈せられ、左掌は膝上に伏せられている。

まず第一に、本像の造像記には「無上菩提道を得んことを願う」とあり、盧舎那仏が得菩提、成道と結びつけて考えられていた一面をうかがい知ることができ、極めて興味深い。

また、次節b.でも後述するやはり武周期頃に造られた龍門石窟の古上洞（図9）、龍華寺洞各正壁中尊像の右手の印相は、膝上に仰向けた第一、二、三指を伸ばしその他は屈せられ、老龍洞龕像の印相と第三指以外同じである。筆者は古上洞、龍華寺洞、老龍洞龕各像は同じ印相として造られたと考える。ここで、6世紀前半に描かれたインドのアジャンター石窟第1窟前室左壁の降魔成道図[13)]に目を転じてみると、釈迦像の右手の印相は、古上洞、龍華寺洞各像同様、第一、二、三指を伸ばし、その他の指を屈している。従って、盧舎那仏銘をもつ老龍洞龕像の右手の印相も、願文と考え合わせれば触地印と解することができ、触地印を示す擂鼓台南洞中尊像を盧舎那仏とする筆者の説に対して強い傍証となる。

龍門石窟東山には、触地印であったと推測される大足元年（701）「菩提像」銘像が1体あり、[14)]擂鼓台南洞中尊像のような触地印の盧舎那仏像を創作するにあたっては、インドから王玄策等が請来した釈迦の菩提瑞像を参考にした可能性もある。それは前述のごとく、『華厳経』が釈迦成道直後から

初転法輪までの間の沈黙のうちに説かれたという事柄に由来するであろう。

また、龍門石窟の盧舎那仏像の中には、「盧舎那像を造って西方浄土往生を願う」という龍朔2年（662）の造像記をもつ像があり[12]、本像は立像で施無畏印をとるが、盧舎那仏が阿弥陀信仰ともつながる一面を示しており興味深い。実は前述した老龍洞の盧舎那像の蓮華座は、左右の脇侍菩薩立像の蓮華座と蓮茎でつながっており、龍門の一般的な阿弥陀仏像と脇侍菩薩像の関係に近い。

唐時代の龍門石窟には、印相のわかる阿弥陀銘像151体のうち四割弱の53体が触地印をとるという事実があり[36]、触地印を結ぶ盧舎那仏像が造り出される背景には、当時龍門でも大流行していた阿弥陀信仰も関係していたであろう。浄土教を広めた善導が奉先寺洞大盧舎那仏像を監督、造営していた事からも、盧舎那仏信仰と阿弥陀仏信仰は双方向で関係があったと考えてよさそうである。

b. 龍門石窟古上洞（第1517号窟）像（図9）

古上洞正壁像は、その印相が老龍洞第204号盧舎那仏龕像の印相と同様で、台座形式が擂鼓台南洞中尊像の台座と同じ点から注目される。古上洞像の制作年代を考える際比較対象となるのは、龍華寺洞（第1931号窟）正壁中尊像である[15]。龍華寺洞像は、通肩にまとう大衣の衣文線が体の前方で広い間隔をもち同心円状に表現される点、またややずんぐりとした体軀の量感、厚みのある脚部等の特徴が古上洞像と同じで、両者は同時期の制作と考えられる。龍華寺洞の前庭壁面には長安3、4年（703、704）銘の龕像があり、龍華寺洞像制作年の下限はこの頃としてよい。また両者は、一章【二】で触れた高平郡王洞像とも様式的に近い事から、およそ武周期の作とみられる。

まず前節a.で触れたように、古上洞、龍華寺洞各正壁中尊像と盧舎那仏銘をもつ老龍洞龕像の印相は基本的に同じ降魔触地印と考えられる。龍華寺洞像の台座は、奉先寺洞盧舎那仏像（図10）と同様八角形で下縁に覆弁反花蓮華文を施すが、その正面格座間部分には、破損し模糊としてはいるものの、奉先寺洞盧舎那仏像台座同様、邪鬼を踏みつける天部像を彫り出している。

さらに、天部像の左右にはその天部像ないしは台座上の如来像を拝む二人の人物立像が表されている（図11）。この二人物像は、釈迦成道時に敗れた魔王の「娘たち」、あるいは玄奘の『大唐西域記』が釈迦の成道を証明したと伝える「二人の地神」と推測される。この事から龍華寺洞正壁中尊像が降魔成道の釈迦像を表現している可能性は高い。仏身観の発展から考えれば、釈迦から盧舎那に成っていくので、奉先寺洞盧舎那仏像と龍華寺洞の釈迦仏と考えられる像が同様の台座に坐すのは何ら不思議なことではない。

古上洞像、龍華寺洞像の舟形光背は、内側に火焔文、外側に伎楽天像を施し、奉先寺洞盧舎那仏像の舟形光背（図10）と同様の意匠である。古上洞像の仏と考えられる印相は前述の如く老龍洞盧舎那仏龕像と同じ触地印である。こういった盧舎那仏像との印相、光背の形式の一致から、古上洞像が盧舎那仏を表現している可能性は高い。そしてこの古上洞像の台座が、宣字形で下縁に覆弁反花蓮華文を施すという、擂鼓台南洞中尊像の台座と同じ形式である事は、筆者の擂鼓台南洞像盧舎那仏説の傍証となる。また、古上洞は左右側壁に未完成ながら千仏像を配しており、擂鼓台南洞像と同様の尊像構成である。従って擂鼓台南洞が盧舎那仏と千釈迦の世界を表現している可能性がさらに高まった。

c. 伝宝慶寺将来龕像

東京国立博物館東洋館に陳列されている伝宝慶寺将来龕像群は、元来武則天が八世紀初め頃に長安に建立したと伝えられる光宅寺七宝台にあり、後に宝慶寺に移されたものとされている。

このうち本稿でまず注目するのは、菩提樹下で触地印を結び、偏袒右肩に大衣をまとい結跏趺坐する仏菩薩三尊像である（図12）。同様の形式を示す像が伝宝慶寺龕像群には合計３基あるが、これらの龕像は菩提樹下で触地印をとることから、ほぼ間違いなく「釈迦の降魔成道像」と考えられる。

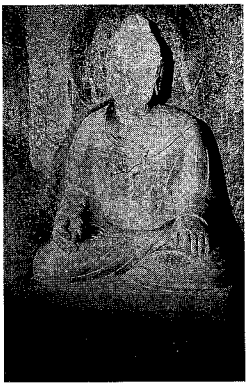
この３基でまず注目されるのは、右腕に単純な図柄ながら臂釧をつける点である。また、３基はいずれも宣字形台座に女性とおぼしき人物像を配しているが、これらは釈迦の成道を証明した二地神であろう[16]。宣字形台座は、おそらく成道時の金剛宝座を表現しており、擂鼓台南洞中尊像の宣字形台座

もまた、金剛宝座から派生したとする筆者の論を裏づけている。さらに、本稿で取りあげる5基の龕像全てが、擂鼓台南洞中尊像、周壁像と同様、左手を腹前におさめている。

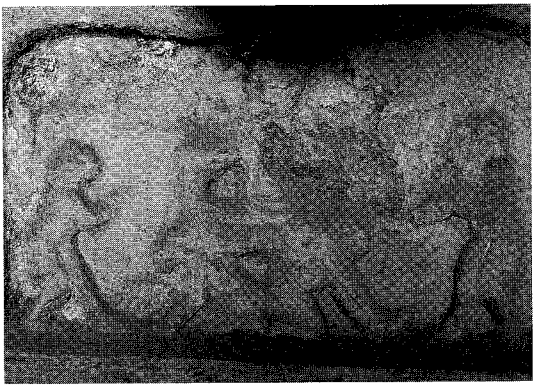
次に挙げたいのは、やはり菩提樹下の宣字形台座の上に、偏袒右肩に大衣をまとい触地印で結跏趺坐する像である（図13）。本像は右腕に臂釧をつけ、二地神像を台座に彫り出す点も図12の龕像と同じだが、唯一異なるのは、頭に三山冠を着ける事である。玄奘の『大唐西域記』には、仏陀伽耶大塔の触地印像が造られた際のエピソードとして、瓔珞、宝冠で飾り立てたとある。玄奘や王玄策、義浄らが実際見たり、図像を写した仏陀伽耶大塔の像もこのような三山冠をかぶっていた可能性は大きい。何故ならば、次節d.で扱う四川省広元千仏崖には、三山冠をつける同様の彫刻を「菩提瑞像」とする先天元年（712）の銘があり（図16）、図13の本像もまた仏陀伽耶大塔の菩提瑞像を写した図像集のようなものから造形されたと推測されるからだ。

さて、本稿で最も注目すべきは、豪華な宝蓋の下で偏袒右肩に大衣をまとい、触地印を結び宣字形台座に結跏趺坐する仏菩薩三尊像である（図14）。本像ではまず、これまでの触地印像が台座に地神像を配した部分に二頭の獅子像を置いている。また右腕に蓮華文の臂釧をつけるほか、胸に擂鼓台南洞中尊像と同様、下向きに尖った幅広の飾りを着ける。

宝冠も擂鼓台南洞中尊像と同じ円筒形のいわゆる帝釈冠で、巻きの強い唐草、蓮華、宝珠と思われる意匠があしらわれている。宝珠文、蓮華文を施す点擂鼓台南洞中尊像と同様な上、宝冠の頂上部分が若干中央左右の三箇所で尖っており、この点も擂鼓台南洞中尊像と共通している。興味深いのは、擂鼓台南洞中尊像と従来より類似が指摘されている、敦煌莫高窟出土現ニューデリー国立博物館蔵瑞像集の像（図15）の宝冠もまた同じように三箇所で尖る点である。擂鼓台南洞中尊像とニューデリーの瑞像は、特に正面の宝珠部分が突き出して表現されている[17]。さらに宝冠について言及すると、日本の鎌倉時代に描かれた華厳海会善知識図の上方中央、毘盧舎那如来像の宝冠も、破損著しいが最上部のみは元の部分を残しているようで[18]、頂上の宝珠部分が七箇所にわたり尖っている。盧舎那仏がこのような帝釈冠に似たものをかぶる理由は、仏身観の発展から、釈迦が転輪聖王のような理念的地



9　古上洞正壁中尊像



11　龍華寺洞正壁中尊像台座正面浮彫

10　奉先寺洞盧舎那仏像

12　伝宝慶寺菩提樹下無冠三尊像

13　伝宝慶寺菩提樹下三山冠三尊像

14　伝宝慶寺宝蓋下円筒冠三尊像

位についた証しであろう。『梵網経』では、盧舎那仏が釈迦と別無しと説いた後、釈迦は金剛華光王座と称する「王座」に坐すとしている[19]。この事は、今回挙げた他の伝宝慶寺龕像の菩提樹と二地神像の部分が、図14の龕像ではそれぞれ宝蓋と獅子像に代わっていて、すでに歴史的釈迦像から脱皮している点からもうかがえる。

また、伝宝慶寺宝蓋下円筒形冠像（図14）とニュー・デリー瑞像に見られる円光背周囲の火焔表現は、龍門石窟奉先寺洞盧舎那仏坐像、東大寺大仏像蓮弁に毛彫りされた釈迦像にも見られ、伝宝慶寺、ニュー・デリー、擂鼓台南洞の各像を盧舎那仏とする筆者の説の傍証となる。

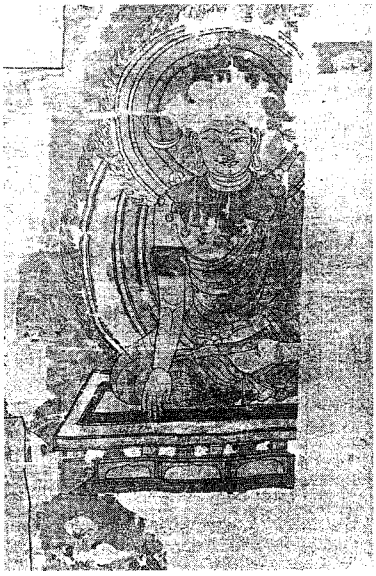
最後に図14の伝宝慶寺龕像については、左右に侍する菩薩立像が各々宝冠に化仏と水瓶をつけており観音、勢至と考えられ、よって中尊像を阿弥陀とする問題が残っている[20]。しかし、本節 a. 101頁で述べたように、龍門石窟の盧舎那仏像には西方浄土往生の願文が付せられたり[12]、善導が盧舎那大仏像造営の監督に当たるなど、当時の洛陽、長安では盧舎那仏信仰と阿弥陀信仰には双方向性があったと考えられる。本像に対してもあるいは、盧舎那仏像を造り、西方往生を願う気持ちが込められていたのかもしれない。

d. 四川の菩提瑞像

四川省広元千仏崖第33窟は『大唐利州刺史華公柏堂寺菩提瑞像頌併序』という先天元年（712）銘があることで有名である（図16）。本窟中尊像は宝樹樹下の宣字形台座に結跏趺坐し触地印をとり、偏袒右肩に大衣をまとい胸飾と臂釧をつけ、頭には三山冠をかぶる。台座下部前方には釈迦の成道を証明した二地神像が浮き彫りされている。

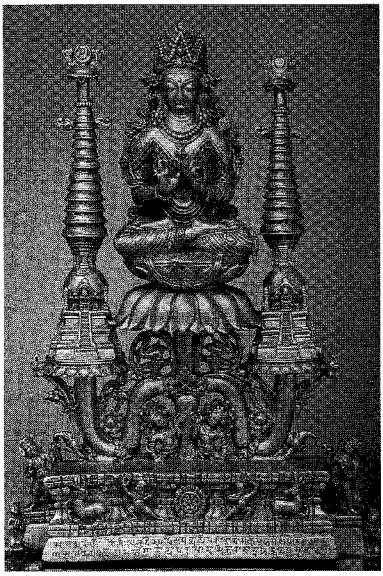
広元千仏崖像は、伝宝慶寺将来三山冠触地印三尊像（図13）と比較してみた場合、菩提樹の代わりに宝樹を配し、如来像の周囲に阿難、迦葉両像、仁王像を加えるなど、若干加わった要素があるが、基本的には両者が同じ主題、すなわち釈迦の菩提瑞像とわかる。ことに、宝冠中央の前立てのような意匠に向け、左右から唐草文が巻き込むように表現される点まで両者類似している事は興味深い。

結局、ここでは伝宝慶寺将来三山冠触地印像が釈迦の菩提瑞像であると証



15　ニュー・デリー国立博物館蔵瑞像集部分

16　広元千仏崖第33窟菩提瑞像



17　カールコータ時代の「飾られた仏陀」像

18　擂鼓台南洞周壁「飾られた仏陀」像

明され、これと異なる像容を示す円筒形宝冠を着けた伝宝慶寺将来触地印像（図14）は、別の主題を表現していることがわかる。

この広元千仏崖像の造像記は、中央部分が五代の乾徳6年（924）に越国夫人呂氏により削られ、新たな補修銘「遮那仏龕」が記されている。擂鼓台南洞や伝宝慶寺龕像が制作されてから二百年も経ているので、釈迦に対する仏身観が著しく発展しているのは言うまでもないが、釈迦の菩提瑞像から盧舎那仏の図像が生み出されたようすをうかがうことができ注目に値する。なお本像をはじめ、他にも四川省にみられる菩提瑞像を大日如来と解釈し、それと共に擂鼓台南洞中尊像もまた大日如来とする中国の研究者の論には賛同しかねる[21)]。

e. カールコータ時代（カシュミール）の飾られた仏陀像（図17）

擂鼓台南洞の周壁千仏像のうち、偏袒右肩の触地印像は容易に釈迦とすることができよう。その他、三叉形の肩掛けをつけた施無畏印、禅定印、転法輪印をとる千仏像群について考える際には、八世紀頃カシュミールで造られた（一説にギルギット製）真鍮製のいわゆる飾られた仏陀像が参考になる[22)]。

本像は、蓮華座上に結跏趺坐し転法輪印を結び、下部台座中央には法輪があり、左右に二頭の鹿が表され、釈迦の初説法に関係すると推測される。中央像の蓮華座は、二龍王が下部左右に配された太い蓮茎上にあり、その蓮茎でつながった二基の大きな塔が左右にそびえているため、本像もまた仏伝中の初説法像というよりは、やや普遍的、大乗的な釈迦像と考えられる。本像と擂鼓台南洞像周壁の飾られた仏陀像（図18）と比較した場合、大きな蓮華座に坐し、耳璫をつけ、三叉形の肩掛けの上縁に連珠、下縁はフリルで各々飾る点が共通している。図18に挙げた像は、高い冠と、左右に幅広くひろがる冠帯の有り様までカシュミール像と似ている。図18の千仏像は施無畏印をとるが、周壁の飾られた仏陀像の中には転法輪印像もある。また周壁の飾られた仏陀像は多くが、カシュミール像のように、三叉形の肩掛けの下に大衣を通肩にまとう。これらの共通点から、擂鼓台南洞周壁の千仏像もまた大乗化した釈迦像と考えられる。

龍門石窟において、飾られた仏陀像は、擂鼓台南洞周壁千仏像と、一章

【二】で触れた2093号龕の二箇所に確認されるのみである。おそらく最新の図像として、カシュミールからホータンあたりを経由し洛陽へもたらされたのであろう。

三章　擂鼓台南洞、中洞における宗教的実践

【一】 擂鼓台南洞と好相行

先に、擂鼓台南洞は『梵網経』の世界を表現していると論じたが、『梵網経』は大乗戒受戒について説く律部の経典である。受戒の前にはまず懺悔をしなければならず、懺悔をするには、仏菩薩の形像の前で、仏菩薩の相を観ずるという好相行を完成させなければならない。すなわち『梵網経』には、「仏菩薩の形像の前に在って、日夜六時に十重四十八戒を誦し、はなはだ三世の千仏を礼して好相を見ることを得しめよ。」と繰り返し説かれている[23]。また同経には「もしは一七日、二三七日、乃至一年にもかならず好相を見るべし。好相とは、仏来りて摩頂し（頭をなで）、光や華の種種の異相を見ばすなわち滅罪することを得。もし好相無くんば懺すといえども益無し」とある。前述の「千仏を礼して」や「光や華の種種の異相」という箇所は、特に擂鼓台南洞周壁像を彷彿とする[23]。

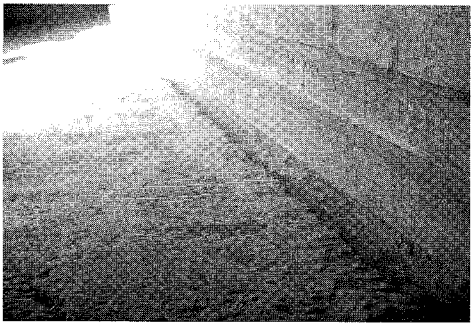
実は、受戒のための『梵網経』に基づいた好相行は、今日の比叡山でも行われているのだが[24]、擂鼓台南洞の造形は受戒のためにつくられ、ここでは好相行がおこなわれていたと考える。

【二】 受戒、好相行と擂鼓台中洞

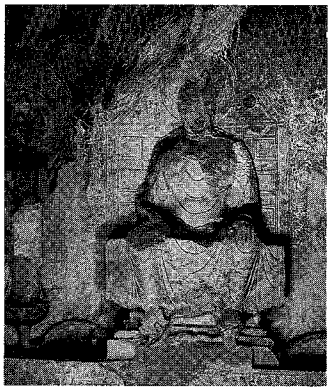
a. 擂鼓台中洞の造形

擂鼓台中洞は、擂鼓台南洞から北へ約15メートルの位置にある。両洞の造形様式は異なるが、両窟は双方で関係があったと推測する。

擂鼓台中洞の平面は馬蹄形で、間口6.3メートル、奥行7.7メートル、高さ



19　擂鼓台中洞中央基壇痕跡



20　擂鼓台中洞奥壁中尊倚坐仏像

5.78メートル、中央にほぼ方形の基壇を設けた痕跡がある[25]。この痕跡に関する1988年に記された顧彦芳、李文生両氏の報告によると、「窟床面中央には原石のままの壇の遺址があり、横2.6メートル、縦1.7メートル、高さは35センチ。壇の周囲には横4.3メートル、縦3.38メートル、高さ1.5センチ、幅9センチの低い凸稜をめぐらす」とある。2002年2月現在、前者「横2.6メートル、縦1.7メートル、高さ35センチの原石のままの壇の遺址」は、近年その上にコンクリート製の方形基壇が築かれているものの痕跡を認めることができ、後者「その壇の周囲をかこむ高さ1.5センチ幅9センチの低い凸稜」は明らかに確認できる（図19)。

奥壁には三日月状に高さ1.5メートルの基壇が掘り残され、その上に全高約2.55メートルの倚坐仏像がグプタ式背障を背に坐し（図20)、脇侍菩薩立像が倚像と蓮茎でつながり左右に配されている。窟内の四壁中段から藻井中央に至るまで、8から10センチの小坐仏像で埋め尽くされ、石窟下部には北壁から正壁、南壁にかけて右繞礼拝する方向で『付法蔵因縁伝』の説く西方付法二十五祖師像が浮き彫りされ、各像の傍らには各々略伝が刻まれている。また前壁から南壁にかけて、『仏説阿弥陀経』『金剛般若波羅蜜経』『六門陀羅尼経』『般若波羅蜜多心経』が刻まれており、その中に則天文字があることから、この窟は武周期の造営とわかる。すなわち擂鼓台南洞とほぼ同時期の制作である。

b. 受戒、好相行と擂鼓台中洞

本窟の機能について、曾布川寛氏は仏名礼懺の法が行われた行道の場ではなかったかと推測している[26]。それは、本窟を別名「大萬伍佛像龕」とも称し、実際おびただしい小坐仏像と祖師像群の存在が、これらの仏名を一仏ずつ唱えながら観像、礼仏を行った僧の場であったろう、という論に結びついている。

大筋で曾布川氏の説に賛同するが、前述の如く、筆者は擂鼓台南洞を『梵網経』と『華厳経』の世界と考えるので、擂鼓台中洞中央に残る基壇の跡は、受戒する戒壇ではなかったか、というもう一歩踏み込んだ議論をしてみたい。

まず正壁の倚像は、龍門石窟同時代の他例から考えて弥勒仏として間違いない。実は弥勒は大乗戒と深いつながりがある。筆者が多くの御教示をいただいた山部能宜氏の著作によると、弥勒と懺悔、大乗戒との関係については、神秘的な見仏体験として五世紀頃から史伝に多くみられる[24]。ことに武周期、武則天の側近であった法蔵の著作『梵網経菩薩戒本疏』中に、「曇無讖に授戒を拒否された道進が、仏像の前で邀期苦節して戒を求めると、七日後に夢に弥勒が出て、親しく戒と戒本を授けてくれた。それを誦得してから覚めて無讖に見えたところ、無讖は「漢土にも人あり」と言い、ともに戒本を訳出してくれた」という話を載せている[27]。このエピソードは『高僧伝』の「曇無讖伝」にすでにあるが、『高僧伝』では戒を授けるのは「釈迦」となっており、これを法蔵が「弥勒」としているのは興味深い。

弥勒と盧舎那が関係ある事については、すでに宮治昭、朴享国両氏が指摘している[28]。隋の闍那崛多訳『仏本行集経』では、弥勒が発心したのは、弥勒自身が転輪聖王であった時とされ、その時の名が毘盧遮那であったという。また『六十華厳』には、盧舎那菩薩が兜率天で離垢三昧に住し、やがて盧舎那仏となると説かれ、弥勒下生になぞらえたような話が出てくる[28]。さらに『続高僧伝』や『華厳経伝記』には、隋の霊幹が蓮華蔵世界観や弥勒天宮観を経本から作った話や、唐永隆年中に廓神亮が兜率天宮で弥勒に礼した際、一菩薩が廓に何で華厳を受持していないかと言ったとあり[29]、華厳信仰と弥勒信仰には関連があったと知られる。

造形の上からも弥勒と盧舎那の近しい関係はうかがえる。安陽宝山の開皇9年（589）銘を有する霊泉寺大住聖窟では、正壁に盧舎那仏像、側壁に弥勒仏、阿弥陀仏各像を配している。大住聖窟にも「世尊去世伝法聖師」として24体の祖師像が線刻され、仏法の永続性を願ったであろう事が、すでに曾布川氏により指摘されている[26]。また、龍門石窟で675年完成の奉先寺洞盧舎那仏像造営にかかわった恵簡は、673年に弥勒仏龕、いわゆる恵簡洞を完工している。

好相行の完成は、『高僧伝』、『梵網経菩薩戒本疏』にある曇無讖と道進の関係のように、行の完成を師に証明してもらわねばならない。これは現在の比叡山にまで伝わる方法で、師資相承という事が受戒にあたり大変重要である[24]。このため、筆者が戒壇を設置していたと考える擂鼓台中洞には、『付法蔵因縁伝』に基づく25体の祖師像が浮き彫りされたと推測する。

【三】 擂鼓台南洞、中洞と法蔵

筆者は、擂鼓台南洞、中洞の造営に華厳宗第三祖の法蔵がかかわったのではないかと考える。法蔵は、武則天の側近であり、また695年から699年にかけて洛陽で実叉難陀が『八十華厳』を漢訳する際にも参加している。因みに武則天はその訳場に来て、漢訳に対する序文を書いている。武則天といえば、自らを下生した弥勒仏としていた事は有名で、則天文字の残る擂鼓台中洞に弥勒仏倚像があるのも、武則天や法蔵周辺の人物とのかかわりからであろう。法蔵は武則天との関係のみならず、中宗、睿宗の戒師もつとめている[29]。また法蔵は、龍門石窟賓陽洞近くに則天文字で長安元年（701）銘を残しているので、この銘の存在を信じれば、まさに擂鼓台南、中洞が造られた時に龍門石窟を訪れた可能性が高くなる。因みに龍門石窟に残された法蔵の銘は、乾封2年（667）阿弥陀像を魏字洞に寄進する銘のほか、別に二箇所ほど報告されている[31]。

法蔵の著作には『梵網経菩薩戒本疏』『華厳経探玄記』等多数あり、さらに擂鼓台中洞に刻まれた『般若波羅蜜多心経』の注釈書である『同略疏』も702年に書いている。

本稿で最も注目すべきは『梵網経菩薩戒本疏』で、その内容は擂鼓台南洞、中洞の造形を彷彿とするものがある。まず南洞のイメージにつながるような箇所を列挙すると

＊「蓮華蔵世界に日月を懸けて以て臨照し、菩提樹王は甘露を開いて之れを済うことを得たり（大・40・602上中、以下大・40は略）」とある。「菩提樹王」は釈迦を指すのは言うまでもないが、法蔵は同書606上で、「盧舎那は則ち是れ釈迦なり」と書いているので、筆者が盧舎那仏と考える南洞の中尊像（図1、5、7）が宝冠をつける理由が法蔵の言葉の中にある。ニュー・デリーの瑞像図頭部右側（図15）には月らしきものが見えるのも興味深い。

＊修行の境地を比喩的に表現する件で、「摩尼の宝を雨らして黎元をうるおすに等しく、瓔珞の以て身を厳るに譬える（602中）」とあり、南洞中尊像の宝冠に大きな摩尼宝珠が施され、南洞周壁千仏像（図2、3、4、6、18）がおびただしい瓔珞で飾るのを想起する。

＊本書は『梵網経』の注釈書なので、盧舎那仏が化身としての千釈迦をあらわし、その千釈迦が虚空、法界に遍満するさまは、605下から606中まで、列挙しきれないほど繰り返し語られている。好相行と、受戒が師資相授を重視する旨記されているのも『梵網経』に同じである（645上中）。

また『梵網経菩薩戒本疏』の最後には、「仏性は成仏本有の因と為り、戒巻は外縁と為り、伝授はいわく過去より伝えて現在に至り、現在は未来に向かい、展転相受するがゆえに不絶というなり（655上）」とあり、擂鼓台中洞に、祖師像から弥勒仏像までの時間的経過を表す尊像が彫られた理由がわかる。

一方『華厳経探玄記』の中で、法蔵は盧舎那仏の光明遍照の有り様について「平漫遍」と「重重遍」と表現し、これについて玉城康四郎氏はそれぞれ「やすらかに広く遍満していること」「重なり合って遍満していることであろう」とされている[32]。このような光が、『大智度論』のいう「光が化して蓮華となる」という状況になれば、まさに擂鼓台南洞周壁千仏の蓮華座の表現になろう[10]。

擂鼓台南洞、中洞はほぼ同規模の大窟である上、内部彫刻の彫りも精緻で、両窟を造営するには、国家規模の財力が背景にあったと推測される。南洞の彫刻様式は抑揚が利いてめりはりがあり、中洞の様式は抑揚がやや緩慢で、二窟の彫刻様式は異なるが、これは官営工房に様式表現の違う二つの流派があったと考えてよい[33]。

『唐大薦福寺故寺主翻経大徳法蔵和尚伝』には、法蔵が雍州、洛州の人々に華厳信仰を高揚させるため「七処を像図せるもの」を大量に作り配ったという[34]。すなわち華厳宗第二祖の智儼も「華厳蔵世界図」を造っているが、法蔵も図像の制作をしていた事がわかる。擂鼓台南洞の造形は、唐代龍門石窟全体の彫刻史の流れから考えると、中尊像、周壁千仏像（殊に飾られた仏陀像）ともに突発的に現れた図像と様式である。法蔵自身、祖父の代に康国（今のサマルカンド周辺）から来朝した一族の出身であり、また実叉難陀が于闐国（今のホータン）から『八十華厳』をもたらし、695年から699年にかけて洛陽で漢訳している点から考えて、インド、中央アジアの図像が、敦煌莫高窟出土ニュー・デリー国立博物館蔵の図像集（図15）のような形で新しく法蔵のもとに伝わっている事は充分に考えられる。法蔵は、そういった目新しい図像を使い、『華厳経』『梵網経』また他の多くの経典を学びつつ、禅定の中で浮んできたイメージを、擂鼓台南洞、中洞の造形制作に当てたと推測される。

二章【二】a. でみてきたように、唐代龍門石窟において、盧舎那仏の図像は全く一定していなかった[12]。そんな中で擂鼓台南洞の造形制作の際、法蔵の脳裏には、玄奘が語った仏陀伽耶大塔の菩提瑞像、695年に義浄がもたらした金剛座真容像があったと思われる。また、713年に記録された法蔵の辞世の句は「西方の浄域は俗塵を離れ、千葉の蓮華は車輪のようである。いったいいつ仏の身となることができるのであろうか[35]」というもので、そこには阿弥陀仏の世界と、盧舎那仏の世界が重なっていた、あるいは同一視されていたであろうと解釈されている[35]。唐代龍門石窟には、前にもふれたように触地印の阿弥陀像が極めて多く[36]、法蔵が盧舎那仏像に触地印を採用した背景には、法蔵の阿弥陀信仰も関係していたと考えられる。このようにみていくと、擂鼓台南洞中尊像と似た伝宝慶寺将来円筒冠触地印像（図14）が、

観音、勢至両像を従え、阿弥陀仏とオーバー・ラップするように表現されていた理由もわかる。

結　び

これまでみてきたように、およそ武周期に造られた擂鼓台南洞は、中尊像を盧舎那仏とする『華厳経』『梵網経』の世界を表し、そこでは受戒に必要な好相行がおこなわれていたと考えた。また隣接する擂鼓台中洞は、大乗戒と密接な関係をもち、武則天が自らをその姿と称した弥勒仏像と、大乗戒で重んじられる師資相授を具現した祖師像を配し、中央に戒壇を設けた場であったと推測した。そして両窟を企画造営した人物として、武則天の側近であり、阿弥陀信仰も有していた華厳宗第三祖法蔵を想定するに至った。

註

1）肥田路美「唐代における仏陀伽耶金剛座真容像の流行について」『論叢　仏教美術史』吉川弘文館、1986年、172-173頁。
　龍門石窟東山及び長安等でつくられた700年頃の造形について、華厳経系の思想をもって解釈した先行論文に、金理那氏の「降魔触地印仏坐像研究」『韓国古代仏教彫刻史研究』一潮閣（韓国）、1989年、270-336頁がある。ここに記して学恩に対する感謝と、敬意を表します。

2）宮治昭「バーミヤンの「飾られた仏陀」の系譜とその年代」『佛教藝術』137号、1981年。

3）温玉成「龍門唐代窟龕の編年」『中国石窟　龍門石窟（2）』平凡社、1988年、210頁。

4）常青「試論龍門初唐密教彫刻」『考古学報』2001年3期、338-340頁。筆者は上下の小龕第2093号、2094号を一組と考えない点について常青氏と意見が一致するが、上下小龕の制作年代に関しては本文の通り常青氏と考えを異にする。

5）高崎直道「Ⅰ．華厳思想の展開」『講座大乗仏教3　華厳思想』春秋社、1983年、3頁。木村清孝「華厳経の受容と法蔵の生涯」『人物　中国の仏教　法蔵』大蔵出版、1991年、10頁。

6）大正24・1000上-。

7） 大正10・94中。大正10・251中-255下。

8） 広元千仏崖第33窟菩提瑞像窟中尊像の台座もまた宣字形台座である（本文図16）。本文二章【二】c. も参照。

9） 大正24・997下。同1003下-1004上。

10） 宮治昭「宇宙主としての釈迦仏―インドから中央アジア・中国へ―」『曼羅と輪廻―その思想と美術―』佼成出版社、1993年、255-256頁。『大智度論』大正25・115上。

11） 大正51・170上。

12） 唐代龍門石窟の盧舎那仏銘像は、制作年代順に以下の通りである。以下『総録』とあるのは、劉景龍、楊超傑著『龍門石窟総録　全12巻』中国大百科全書出版社、1999年の略称。「文字」とあるのは、同本の「文字著録」の略。

① 662年銘、第714号龕（蓮華洞門外南側）、双領下垂式大衣で蓮台上に立ち、右腕を屈して挙げ（『総録』は説法印）、「西方浄土往生を願う」願文あり。『総録』５巻、文字50頁、図版399-402。

② 675年完成奉先寺洞中尊像。通肩式大衣で、八角形台座に坐す。台座上部には仰蓮、下縁に覆弁反花蓮華を施す。両手先は破損。開元の銘から盧舎那仏とわかる。

③ 677年銘、第1934号―Ｎ２龕、通肩式大衣をまとい、束腰蓮華座に坐す。両手先は破損。『総録』８巻、文字95頁、図版465。

④ 691年銘、老龍洞第669号―第204号龕、双領下垂式大衣をまとい、たっぷりとした半球状の仰蓮蓮華座に坐し、印相は本文の通り。『総録』４巻、文字103頁、図版669（本稿図８）。

13） 大村次郷『釈尊―その前世と生涯の美術』NHK 出版、1994年、図62。因みに、アジャンター第26窟の降魔成道浮彫像の釈迦像もまた、右手を仰向けにして触地印をとる。同書図63。

14） 「菩提像」銘龕、第2071号龕。頭部はほとんどを破損しており、宝冠の有無はわからない。偏袒右肩式に大衣をまとい、束腰蓮華座に坐す。両腕とも破損するが、右腕は下におろされ、触地印をとっていたと考えられる。

15） 『中国石窟　龍門石窟（２）』平凡社、1988年、図179。

16） 玄奘著、水谷貞成訳『大唐西域記　中国古典文学大系第22巻』平凡社、1971年初版１刷、1975年７刷、264-265頁。インドでは地神、地天は女性神と考えられることが多い。

17） 擂鼓台南洞中尊像とニュー・デリー瑞像の類似点は、他に＊切れ長の目がつりあがる表現＊宝珠を下げた幅広の胸飾表現については、胸飾上部に連珠を飾る点まで共通する。ことに胸飾の形式については、ニュー・デリー瑞像の大ぶりの蓮弁文様のようなデザインが、擂鼓台南洞周壁像と似ている。＊ニュー・デリー瑞像の台座は、かなり中国化された宣字形。ただし最下部が破損しているもよう。

18） 石田尚豊氏は、「この中尊は上部の損傷がはなはだしい。墨線の冠文様、宝冠

上縁の朱、さらに先端の宝珠飾は、それぞれ一部を残し、ほとんど原形をとどめなない」とされている『日本の美術　第270号　華厳経絵』至文堂、1988年、41頁。宝冠頂上が宝珠部分で七箇所尖っているについては、同様の「明本　華厳海会善知識曼荼羅図」(『奈良六大寺大観　第11巻　東大寺３』岩波書店、1972年、149頁）で鮮明なので、この形を華厳世界の毘盧舎那如来の宝冠の一特徴としてよいと考える。

19)　大正24・1003下。

20)　杉山二郎「宝慶寺石仏研究序説」『東京国立博物館紀要』第13号、1978年、279頁。因みに、杉山氏は本稿図13の三山冠龕像を華厳の盧舎那仏とみている。

21)　常青註(4)前掲書、356頁。羅世平「千仏崖利州華公及造像年代考」、佻軍「広元千仏崖初唐密教造像析」共に『文物』1990年、６月。まず第一に、いずれも「菩提瑞像」の銘を無視している。第二に、佻軍氏は広元千仏崖蓮華洞右壁像(触地印像）及び第33「菩提瑞像」窟中尊像を、『陀羅尼集経』大正18・785、786の説く「仏頂尊＝大日如来」とするが、『陀羅尼集経』の「仏頂尊」は「掌を仰むける」とあり、また「左に侍する金剛蔵菩薩像は金剛杵を持つ」とあり、いずれも蓮華洞右壁像、第33窟像と合わない。

また、同『文物』49頁の丁明夷氏の記述に始まる、広元千仏崖第33窟他、四川省の他窟にも見られるいわゆるグプタ式背障を「六拏具」と称し、これを密教像の根拠に挙げる論について、そもそも「六拏具」の出典は『造像量度経』大正21巻であり、清朝の工布査布訳の経典を根拠としたこの解釈は到底受け入れられない。

22)　宮治氏はこれを「宇宙主仏陀像の一つの帰結を示す」姿としている。宮治昭註⑽前掲書、248-250頁。

23)　大正24・1006下。1008上、下。

24)　堀沢祖門「好相行の話」『求道遍歴―十二年篭山そしてその後』法蔵館、(1979年）1984年、70-86頁。山部能宜「『梵網経』における好相行の研究―特に禅観経典との関連性に着目して―」『北朝隋唐　中国仏教思想史』法蔵館、2000年。山部氏からは直接多くの御教示もいただいたので、記して謝意を表します。

25)　前掲『中国石窟　龍門石窟（２）』292頁。

26)　曾布川寛「龍門石窟における唐代造像の研究」『東方学報』第60巻、1988年、336-341頁。

27)　大正40・605上-下。

28)　宮治昭『涅槃と弥勒の図像学』吉川弘文館、1992年、575頁。朴享国『ヴァイローチャナ仏の図像学的研究』法蔵館、2001年、25頁。『仏本行集経』大正３・656中、『六十華厳』大正９・605、606。

29)　『続高僧伝』大正50・518中下、『華厳経伝記』大正51・164上。

30)　先天３年（713）に、閻朝隠が撰した『大唐大薦福寺故大徳康蔵法師之碑』大正50・280。

31) 温玉成「華厳宗三祖法蔵身世的新資料」『法音』1984年2期。本論文には、龍門石窟にある合計四箇所の法蔵銘が報告されているが、「法蔵」という僧名は一般的で同名異人とも考えられるので、四箇所の銘のうち「康（氏）法蔵」とある長安元年（701）銘、長安3年第676窟外銘の二箇所を華厳宗第三祖法蔵の銘と考えるのが、あるいは妥当かもしれない。「康」の姓は法蔵の祖父の時代に康国（サマルカンド）から来朝したことを表している。遺憾ながら、筆者は本稿執筆時の現在、長安元年（701）賓陽洞区に母の死に際して追刻したという銘を確認していない。

32) 玉城康四郎、前掲註5『講座大乗仏教3　華厳思想』168頁。

33) 擂鼓台中洞に25体の祖師像が彫刻されていることから、本洞を禅宗系統の石窟とみる鎌田茂雄、曾布川寛氏等の意見があるが、あるいは両窟の造像様式の違いは、このようなところから来るのかもしれない。一見、禅宗系統と華厳系統の法蔵は関係が希薄な感じを受けるかもしれないが、法蔵について713年に書かれた前掲註㉚『碑』には、法蔵が「禅を悦び」とあり、また、法蔵の著作『華厳一乗教義分斉章』（大正45・489中）では、「もし頓教（一足飛びに、直感的に真理を把握すること）に依らば一切の行位は皆不可説なり」とあり、このような思想態度が、やがて澄観の「禅宗に順ず」ということにつながり、「華厳禅」へ結びついていく、吉津宜英『華厳禅の思想的研究』大東出版社、1985年、94-95頁。従って、擂鼓台中洞が禅宗系――例えばやはり武則天の側近だった北宗禅の神秀――の作であっても、法蔵とのかかわりにおいて矛盾はない。

34) 大正50・284中。

35) 前掲註30『碑』大正50・280下。木村清孝「智儼の浄土思想」『藤田宏達博士還暦記念論集　インド哲学と仏教』平楽寺書店、1989年、643頁。木村清孝前掲註5書、88頁。

36) 前掲註12『総録』によると、阿弥陀銘247例、このうち印相明らかなのは151例。印相のわかる阿弥陀銘像のうち、説法印（施無畏印）が五割強の83例、触地印が四割弱の53例ある。この他尊名不明の触地印像が513例あるので、「触地印の阿弥陀像」の数は、さらに増える可能性がある。一方、「触地印の釈迦像」は2例、「触地印の菩提像」が1例である。触地印阿弥陀像については別稿で論じたい。

図版出典

1　龍門石窟研究所提供

5　渡辺俊文氏撮影

7、9、10　『中国石窟　龍門石窟（2）』平凡社、1988年、図261、146、111部分

12、13、14　松原三郎『中国仏教彫刻史論　図版編3』吉川弘文館、1995年、661a、663a, b

15 『オーレル・スタイン千仏洞図版解説』臨川書店、1980年、図 XIV 部分
16 『中国石窟彫塑全集　第8巻　四川重慶』重慶出版社、2000年、図22
17 『世界美術大全集　東洋編　インド（2）』小学館、1999年、図32
20 『世界美術大全集　東洋編　隋・唐』小学館、1997年、図100
2、3、4、6、8、11、18、19　筆者撮影

本稿作成にあたり写真を御提供下さると共に、調査研究のために最大級の御配慮を下さった龍門石窟研究所の劉景龍所長、並びに同研究所のお世話になった方々に対し、心から感謝したいと存じます。